

私の一文字「風」

副代表幹事
教育革新委員会 委員長
小林 いずみ

ANAホールディングス/みずほフィナンシャルグループ/三井物産
社外取締役



風があれば、人生も経営も前に進める

会員の方が思いを込めて選んだ一字に、書家の岡西佑奈さんが命を吹き込む「私の一文字」。第5回にご登場いただいたのは、小林いずみ副代表幹事です。

小林 最初に一文字と聞いたときは悩んでしまいました。禅の「円相」が思い浮かんだのですが、円は閉じているから嫌だなと。丸くきれいにバランスが取れていますが、日本はそこに行き過ぎたのではないかと、という気がしているので。いつまでも閉じていては次の世界に行けません。丸が閉じていないような字がないかしらと考えると、思いついたのが視力検査用の記号(ランドルト環)。それから、流れを感じる文字がいいな、そうだ、「風」があったと。ただ、風は角ばっているのが表現したいものと少し違うと思いましたが、このような字を書いてくださって、まさにイメージした風になりました。

岡西 ありがとうございます。今回、小林さんから事前にいただいた「風は円相の対極」というお言葉から、風の「几」の部分を一円相に見立てるように、丸みを帯びたイメージで書きました。風は大昔、中国では大きな鳥の姿をした神様が起すものと信じられていたそうです。神様の姿をかたどった甲骨文字からやがて「鳳」という形ができ、さらに年月が流れる中で、鳳の「鳥」が「虫」に置き換わって「風」になったらしいのです。風といえば、小林さんはヨットに乗られるそうですね。大学時代に3カ月かけてタヒチや南太平洋の旅に出ていらしたとか。

小林 はい。大学卒業後も何度かヨットで旅をしています。ヨットに乗っていると、嵐より苦しいのは風なんです。ヨットは風がないとまったく進めず、次第に水も食料もなくなっていくんです。

岡西 でも、嵐は怖いですよね？

書家

岡西 佑奈

1985年3月生まれ。23歳で書家として活動を始め、国内外受賞歴多数。現代アート『青曲—そして始まりとしての紅畝』を展開。

小林 怖いです。命を落とすこともあります。嵐は何日かたてば必ず去っていきます。それに、嵐が来ると分かっていたらそれに合わせて準備できる。100%完璧ではありませんが、嵐には対応する操船術や船の機能があります。でも、嵐は……。赤道付近に「赤道無風帯」というほとんど風が吹かない地帯があって、南太平洋へ行ったとき、ちょうどそこでエンジンが壊れちゃったんです。

岡西 ええ!? どうされたんですか。

小林 風がわずかでも吹いたらそこにヨットを寄せていきました。そんな日が何日も続き、「ここからずっと出られなかったらどうなるんだろう？」と心配になり、風は人間にとって嵐より不安なんだと実感しました。そう思うと、風のありがたさを感じます。風が吹いていた方が前に進む。止まると最悪です。日本も風がしっかり流れていく社会にならないと、みんなだんだん息ができなくなってしまいます。

岡西 本当にそうですね。メリルリンチ日本証券の経営者のお立場だったときもそのように思われていたんですか。

小林 私は嵐を拾う女だから。部下からはよく「近くにいると嵐が来るから嫌だ」って言われました。

岡西 人の嫌がることをなさってきたんですね。

小林 そういうわけでもないんですが、問題を解決するのはゲームみたいで楽しいじゃないですか。火中の栗を拾うにしても、誰も熱くて手を出さないものは、仮に手を離れたとしても損失を被る可能性がない。私はヨットに乗ることで、人生や経営における風に対するアプローチの仕方を学んでいたのかもしれない。

